

■ 白の階調2015 –folding art– ■ White Gradation 2015 -folding art-

趙慶姫

CHO Kyong Hee

青山学院女子短期大学 現代教養学科

Department of Contemporary Liberal Arts, Aoyama Gakuin Women's Junior College

たたむ、広げる、紙

fold, spread, paper

はじめに

本大会の作品発表展示場所として、学会ウェブサイトに掲載された写真には上賀茂社家町の家々の美しい佇まいと、障子を通した柔らかい光に満たされた座敷が写っていた。

この写真を見たとき、日本の伝統的家屋に観賞のための空間として押板・床の間があり、そこに季節・時間・行事・来客に応じて書画・調度・花を用いた室礼が施されてきたことは、「室内装飾」と捉えるだけでなく、「環境芸術」が日常生活の中で実践されていたといえるのではないかとこの考えが生じた。その実践の歴史を刻む、この室内空間における展示の意味を考えたいという思いで、発表に参加することにした。

1.コンセプト

押板・床の間に設える作品には、時季ごとの取り替えと再設置までの収納が容易であることが求められる。鑑賞書画の形態の一つ「軸装」は、持ち運びの容易さから中国で仏画用に普及したものが、日本に輸入され、鑑賞用絵画の形態として流行したとされる。軸装の「巻く」方法は平面作品の持ち運び・収納に適しているが、一方、立体物をコンパクトにしまうには「折りたたむ」という方法がある。

この「たたむ」行為は日本的であるといわれている。日本の折りたたみ文化については、大妻女子大学生生活科学資料館の真家 和生教授が、日本人の身体的な特殊性が脚を折りたたんで座ることを可能にし、それがこの文化の背景であると述べている。和服・布団・屏風・ちゃぶ台など、使わない時は折りたたんでしまっておく生活用具は日本の四季、住環境から生まれたものであるといわれ、扇子・提灯・折形・折り紙など実に様々な「たたむ」文化が日本には存在する。

また建築空間においては、引き戸が重なることも折りたたみの一つの形といえる。襖や障子の開閉によって空間を季節・時間・用途に応じて変化させる日本の伝統的建造物の造りも、この文化の特徴を表している。

これらをふまえ、今回の作品発表「上賀茂地域の歴史環境を活かしたアート作品の展示」においては、「たたんでしまう」ことが可能であり、また収納のためだけでなく、「たたむ・広げる」という行為により、平面から立体、立体から平面への変換が空間のダイナミズムを感じさせる作品を提案することとした。

2.研究の背景

筆者はこの10年間ほど、「白の階調」シリーズとして、白いレリーフの表面の凹凸がつくり出す陰影によって光の表情をとらえようとする研究を行っている。エンボス加工で紙の表面に繊細な凹凸をほどこした作品の制作から始まり、石膏を用いてその独特な質感を活かしながら、より立体的な造形を展開し、最近では木材を用いる試みに取り組んでいる。

この研究は「光」という環境要素をどう自らの表現に取り込むかという意味において、また建築空間に存在させることを意識している点においても、「環境アート」であると捉えているが、従来の研究は特定の場所・環境を前提としているものではなく、ギャラリーでの展示にとどまっていた。建築空間と関わることは本研究の課題の一つであり、このたびの発表にはシリーズの展開としての意味も持たせている。

3.作品の素材

「たたむ」造形に適した素材として紙がある。

紙を折る文化が日本で登場したのは平安時代で、独特の製紙法である“流し漉き”の技術が確立し、折っても折目目が破れない弾力のある和紙が生産されるようになってからといわれる。書画・工芸の材料としてはもちろんのこと、建築素材としても、日本は独自の紙の文化を発展させてきた。

造形教育を受けてきた者・携わっている者にとって、紙は基本でありながら無限の可能性をもつ造形素材である。筆者も白いレリーフを研究テーマに選んだきっかけの一つに、紙を素材とする課題を学生に課してきた中で、紙という素材そのものの美しさに魅かれたことがある。

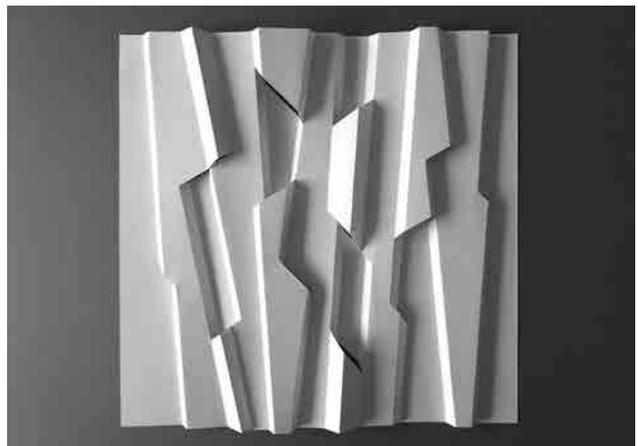
「白の階調」シリーズでは今まで紙を主としてエンボス加工、版画の材料として用いてきたが、研究初期の2006年に紙を折る造形を試みている。直線折りに切り込みを加えたもの、曲線折りと直線折りを交えたものだったが、これは紙そのものの作品ではなく、石膏に置き換える型としての制作だった。この時、1枚の紙の折り曲げのみでできる造形に興味を感じながらも、研究の主対象が石膏素材であったため、それ以上の展開は行っていなかった。今回、紙を作品の素材として選んだのは伝統的な日本建築の素材の一つであるという理由とともに、この研究がベースになっている。

おわりに

住空間におけるアートの意味は作品の鑑賞自体が目的ではなく、芸術の関わりによって、「生活」という社会活動が豊かに変化することにあると考える。本大会の作品発表は、日常の環境にこそ芸術が関わることの意義、それが浸透していた日本の文化の歴史をあらためて認識する機会になった。

参考文献:

- 太田博太郎『床の間-日本住宅の象徴-』(岩波新書, 1978年)
- 真家 和生『日本人と折りたたみの文化』『エプタvol.64』(肌粧品科学開放研究所, 2013年)
- 岡村昌夫『折りたたみ文化の象徴 折り紙』前掲『エプタvol.64』
- 中川武『日本の家 空間・記憶・言葉』(TOTO出版, 2002年)



「白の階調シリーズ」から、紙のレリーフ(2006)の再現